冬の風物詩

夜聖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬の風物詩

【Ｎコード】

Ｎ５３３９Ｊ

【作者名】

夜聖

【あらすじ】

多分なんとなく書いてみただけの、小ネタだったはず。屋根から雪崩れてきた雪に埋まった日番谷を夏梨が発見したり、コタツでのぼせたり、思い切り冬ネタです。語りは一護視点。

「なー冬獅郎ー」
「あー？」
「寝るなら布団で寝ろよ…」
「あー」
「なーってば…」

雪がちらつく真冬の夜。俺と冬獅郎はこたつで温まっていた。…ウチのリビングで。
時刻はすでに１２時を過ぎている。そのため親父も妹二人もすでに就寝中だ。
そして冬獅郎はと言えば、こたつで寝そうになっている。
それもテーブルに顎を載せてだらだらと、まるで溶けちまったかのように。

いつもの冬獅郎からはうかがえない、完全に気の抜けた状態だ。
一言で言うとあれだな、小動物。

「つーかおまえ最初あんなに拒んでたじゃねーかよ」
「あー？」
「あーじゃなくて！」
「あー…」
「冬獅郎っ！！」

先程から「あー」しか言わない冬獅郎にいい加減憤りを覚えた俺はバンッ！と机をたたく。
テーブルの中央に置いてあるミカンが跳ねたけど、それと向かい合っている子供はびくともしねえ。…だめだ、本気でネジ外れちまったみたいだ。

そもそもなぜ冬獅郎がウチに居てリビングでくつろいでるっつーか溶けているのか、原因は…夏梨だ。
どうやら夏梨は学校の帰り、雪に埋もれている銀色に鈍く光る物体を見つけたらしい。
まあ、それが冬獅郎だったわけなんだけど、どうやらこの隊長、間抜けなことに屋根から雪崩れてきた雪に埋まってしまったのだとか。
…神童とも言われている奴がすげー失態だな。
取りあえずその時の光景が、これらしい。

＊＊＊

夏梨は授業を終えてからすぐに学校を出た。
普段ならこの後公園で友達とサッカーでもするのだが、冬になり雪が降ってしまうとそれもできない。
取りあえず家で何をしようかと考えながら、まだ人通りの少ない家路を一人で歩いていた。
昨晩の大雪のせいで珍しく雪がかなり積もっている。
通路を阻害していたであろう大量の雪は歩道側に寄せられている。

そして夏梨は見た、尽きない雪の山から垣間見える、小さな足を。
それらを見ながら外で雪合戦でもしようかと考えていた夏梨は、足をとめた。

ものすごく不自然な形で飛び出したスニーカーをはいた足と、僅かに見えるジーンズの裾。
さらに視線を前のほうにずらすと、雪をかきわける小さな手と雪をかぶった銀色の頭。

それらを見た夏梨の脳裏に映ったのは、いつしかサッカーの助っ人をしてくれたあの少年だった。
それよりも一体どういう格好で埋まっているのだろうか、そこは不可解だが考えている暇があるなら助けてやったほうがいいだろう。

「えっと…冬獅郎、だよな？」

念のため名を呼んで確認する。
だが顔の半分以上は埋まっている日番谷には聞こえていなかったのだろう。それには答えず、雪をかきわける手だけが必死に動いていた。
夏梨はため息をつくと雪山を乗り越えてその手をグイ、と引く。
雪が崩れ、その残骸とともに道路に転げる日番谷。
何が起きたのかにわかには理解できなかったらしく、目を白黒させていたが夏梨に気がつくと少し間を置いて、ばつが悪そうに言った。

「悪い、助かった…」
「いやいいけどさ。ていうか何やってたんだよおまえ？」

訝しげに聞く夏梨。
まさか日番谷が雪ではしゃいでいて埋まったなんてことはないだろ

う。
道端を歩いていて屋根から降ってきた雪に埋まったというところが妥当だろうか。そんな事を考えながら日番谷を見るが、彼は口をつぐんだまま答えない。
そして逸らされる視線。日番谷の事だ、かなり恥ずかしかったのだろう。
夏梨はそんな日番谷を見て何を思ったのか、その手をとり向こうを指す。

「まあ、ウチ来てあったまんなよ。寒いだろ？」
「は？いや、別に寒くはねーけど」
「嘘つくな。ほら行くぞ」
「ちょ、本当に大丈夫だって！離せ！」

確かに日番谷はちょっとやそっとの寒さでは動じない。彼のその言葉も決して強がりとか嘘ではないのだが、そんなこと知る由もない夏梨は嫌がる日番谷を引きずって帰宅。
丁度靴を脱いでいた一護は妹が思わぬものを連れてきたものだから過剰な驚愕を現した。

「と、冬獅郎っ！？おまえどうしたんだよ！？つーか夏梨おまえ…」
「雪山に埋まってたんだよ。取りあえず寒いだろうし連れてきた。一兄風呂沸かしてくれる？」
「雪山に！？何やってたんだよ冬獅郎！？」
「うるせえ！歩いてたら降ってきたんだよ悪いか！」
「隊長ならそれくらい避けろよ…しかも冬獅郎、水と氷の支配者だ

ろ？」
「な、冬獅郎！なんでコイツそんなこと知ってんだよ！？つーかおまえらどういう関係！？」
「一兄騒ぎ過ぎ。いいじゃんそんなこと」
「いいのか！？それでいいのか俺！？」
「黒崎、取りあえず落ち着け…」

とまあ、そんな感じで会話を繰り広げ、なんだかんだ風呂に入ったり夕飯を一緒に食べたりで今に至るわけだった。

＊＊＊

「冬獅郎、流石にそんなところで寝たら風邪ひくって」
「バカは風邪ひかないっていうだろ。おまえなら大丈夫だ」
「俺じゃなくておまえだおまえっ！！つーかそれだけまともに返すって何なんだよおまえっ！！」

遠まわしながらも俺をバカ呼ばわりする冬獅郎。
確かに冬獅郎と比べたら俺はバカかもしれないけど、そんな言い方するかよ普通。

「一兄と冬獅郎、まだ起きてたの…？」

先ほどの俺の声がうるさかったのか、起きちまったらしい夏梨が目

をこすりながらやってきた。
冬獅郎はそれに対して「あー」と答える。またそれかよ。

「ああ、悪いな起こしちまって」
「うん。これで一兄一人だったら蹴り見舞ってたかな」
「…わ、悪い」

なんだ、反抗期か…？
まあそれはともかく、夏梨はだれたままの冬獅郎を一瞥するとため息をついた。

「なんだよ、あれだけ嫌がってたのにかなり寛いでんじゃん」
「あ？あー…」

だからそれやめろ。
「あ」の発音禁止令出すか？…まあそうしたら無視か「うー」のオンパレードでも始まるんだろうけど。

「…寛いでるわけじゃねえ」
「どう見たって寛いでるだろ！しかも我が家のように！！」

あからさまな体勢で正反対なことを言うものだから俺は思わずツッコんだ。
するとずっと目を伏せていた冬獅郎はじと目で俺を見、再び目を閉

じる。
なんだそのムカツク反応。

「…のぼせた」
「「は？」」

俺と夏梨の声が重なる。のぼせた？まさかこたつでか？
冬獅郎は何も言わず相変わらずだれている。
夏梨は何を思ったのか、ずかずかと冬獅郎の背後に闊歩してゆくと、両脇に手を入れてこたつの中から冬獅郎を引きずり出した。

そういえば冬獅郎と夏梨って身長対して変わらねえんだよなー、つか冬獅郎のほうがちっこいって…。
なんか姉貴と弟みてえ。
だらりと全身の力を抜いたまま抵抗しない冬獅郎は、本気でのぼせちまったらしい。
夏梨はまさか本当にのぼせてるとは思わなかったのだろう、刹那頓狂な声を上げる。

「あっつ！冬獅郎本気でのぼせてるし！一兄どんだけ温度高くしてんの！？」
「いや、冬獅郎あんま暑いとだめだから結構低めに設定したんだけど…つかまさかこたつでのぼせるとは思わなかったぜ…」

冬獅郎があつさに弱いのは知っていたけど、まさかここまでだとは俺も思わなかった。

夏梨から離れた冬獅郎はふらふらと足元がおぼつかないながらも廊下に向かってゆく。

「…帰る」

「まてまてまて！そんなふらふらな状態で帰ったら乱菊さん驚くから！まず外出て涼もうぜ！な！？」

まさか真冬に外で涼もうなんて言うとは思わなかったけど、まあ仕方がねえよな。

冬獅郎はため息をつくと壁に寄り掛かる。良く見たらマジで顔が赤い。

こりゃかなりやられてんな。どうりで気力がないわけだ。

取り敢えず俺たちはコートを羽織り、外に出た。

真夜中の空にひらひらと舞う牡丹雪。黒の中に浮かぶ白がなんだかとても幻想的だった。

そしてそれを見上げる冬獅郎。それを見て、何を思ったのか夏梨が俺に耳打ちをする。

「冬獅郎ってさ、こたつより雪の方が似合うよな…つーかのぼせるってどんだけ？」

「…まあ、細かいことは追及しない方が冬獅郎のためだと思う」

確かに、こたつでのぼせる奴なんてそう簡単には居ねえだろう。

つーか冬獅郎ぐらいだろうな。んなものにのぼせる奴って。

冬獅郎は地面に積もった雪をそっと手に取ると、俺の前まで来てそれを吹いた。
息によって飛んだ軽い雪は、見事に俺の顔に密集する。かなり冷たい。

「あはははは！一兄顔変ーーー！！」
「…何しやがる冬獅郎」
「あ？」

冬獅郎による幼稚な行動。らしくないそれに俺は怒るというより、半ば呆れを覚えていた。
第二撃でも撃つつもりだったのか、再び雪をすくう冬獅郎の小さな背中に向かって言うと、肩越しに振り返る。

「…黒崎、お前顔酷い」
「誰のせいだよ！？」
「一兄うるさい。近所迷惑だよ」

そう言いながら、今度は夏梨が俺の顔面に雪を押し付けてきた。
しかも冬獅郎のように吹きかけるのではなく、手を思い切り押し付けてきやがって……。

「夏梨ーーーーーっ！！！」
「わっ、一兄雪玉投げるなよ！てか冬獅郎…大丈夫？」

夏梨に向かって投げた雪玉の流れ弾が冬獅郎の頭部に直撃した。
それに気づいていないのか何なのか、本人は背中を丸めたまませっせと何かを作っている。
まあ、一応ゆるめに作ったからな。気付かないのも不自然ではないかもしれない。
だが俺はこの時気付いていなかった。冬獅郎の額に、思い切り青筋が立っていたことを。

「手伝え、黒崎ぶっ潰す」
「雪合戦だな！よし覚悟しろよ一兄！」
「って集中攻撃かよ！！」

言い終える前に雪玉を投げてくる冬獅郎。
相当勢いをつけているのか何なのかは知らないけど、ものすごい速さのそれは目で追うのがやっとだ。
辛うじてそれをよけたが、雪玉にしては重い音を聞いて一瞬固まった。

地面に落ちて崩れた雪玉の間から垣間見える光沢のある物体。
それが氷だということは一瞬でわかった。

「待て冬獅郎！まさかそれ全部氷突っ込んでるのか！？」
「何の話だ」
「しらばっくれんなよ！本気で危ねえからやめろそれーーー！！！」

当然聞く耳を持たない冬獅郎は逃げる俺にかまわずそれを投げてくる。
冬獅郎と雪合戦をしたら怪我は必至かもしれない。こいつとはやらないのが賢明だろうな。
俺と冬獅郎の一見平和そうでも実は凶器を伴ったその追いかけっこは、見兼ねた夏梨が止めに入るまで続いた。

（後書き）

何故か久々に何かを投稿したくなって（本当に不明です）サイトから抜粋してきました。
なんか最近夏梨ちゃんがはやっているっぽいので、なんとなく夏梨ちゃんがらみのものをチョイス…。
…こんなことをしている暇があるなら書かなければならないものがいっぱいあるのにですね＾＾；

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5339j/

冬の風物詩

2010年10月11日00時36分発行